

〈編集後記〉

長野市から千曲川に沿って国道 117 号線が通っている。長野五輪で長野県もずいぶんと道路整備が進んだ。しかしその前はかなりひどかった。五輪前にこの国道を通って長野県から新潟県に抜けたことがある。場所によっては、バイクにもかかわらず対向車のトラックと擦れ違いができなかったほどである。でも、それは長野県の話。県境を越えると川は信濃川と名称を変える。ところが同じ名称のままでも 117 号線は違う道路となる。一気に道幅が広がり、整備された路面となる。大物政治家の存在と利益誘導型の政治が一遍でわかった気がした。その信濃川が中越、下越の穀倉地帯を支えているとばかり思っていた。8 月初め我々が燕を訪れたとき、あたりは緑の絨毯と表現しても大げさではない光景がひろがっていた。信濃川の賜物と思っていた。しかし、その信濃川は実は暴れ川で、流域に何度となく甚大な被害をだしていたことが、大河津分水の見学で分かった。また、17 世紀に信濃川氾濫に対する救民対策として和釘の生産が開始され、それが燕の産業集積の端緒のひとつとなったことを考え合わせると、大河津分水の見学でこの地域の母体のようなものなにかを感じ取れたような気がする。

実はこの大河津分水の見学は事前に計画されていたものではなかった。燕市商工観光部新産業推進課の大原務氏の機転で実現されたものである。それだけではない。大原氏には見学先への交渉を事前に中心になって進めていただいた。また燕市商工観光部でのヒアリングの際には詳細な資料を用意していただくとともに燕産業の歴史と現状を明瞭に説明していただいた。最後になったが、ここに記して感謝申し上げる次第である。また、いちいちお名前を列挙できないが、燕市商工観光部、磨き屋一番館、小林工業株式会社、大河津分水資料館、株式会社玉川堂、株式会社東陽理化学研究所、環日本海経済研究所でお世話になった方々にお礼申し上げます。

株式会社東陽理化学研究所で同社の説明をしていただいた長谷川昌氏、環日本海経済研究所でレクチャーをしていただいた中島朋義氏はともに本学の卒業生である。中島氏は経済学部で、長谷川氏は経営学部の卒業生である。長谷川氏の説明を受けて、てっきり理工学系の学卒者と思っていた。地元で生き生きと活躍されている両氏の姿を拝見し、とても誇らしく思え、教師冥利を実感した。勿論私が授業を担当したわけではないが。 (宮寄晃臣)

神奈川県川崎市多摩区東三田 2 丁目 1 番 1 号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 内 田 弘

製 作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前 2-10-2 電話 (03)3404-2561
